



コアジサシに見た夢

NPO法人リトルターン・プロジェクト前代表 増田直也



日本初のコアジサシ屋上営巣地は、羽田空港に隣接する大田区昭和島の下水処理場、「森ヶ崎水再生センター」施設屋上にある。近くに東京港野鳥公園があり、水辺に取り囲まれ、東京湾や多摩川へと水路で繋がっている。かつてこの界隈はコアジサシの営巣場所である砂浜や餌場の浅瀬があり、海水浴場で賑わった遠浅の海で、海苔の養殖も盛んだった。学生の頃、このあたりの埋立地には大きなコロニーが出来ることもあったが、翌年には草が繁茂し、同じ場所でくりかえすことは少なかった。

2001年に発見されたこの屋上営巣地は、コンクリートむき出しの7ヘクタールもある、大田区の公園予定地だった。本来の営巣場所である砂浜や玉砂利河原などが開発によって失われ、行き場を失ったのだろう。200羽ほどのコロニーであったが、浜風が強く、卵が飛ばされて親が放棄したり、割れているものも多かった。それでも孵化するヒナがいて、暑さに喘ぎながらも若鳥となり、5羽が巣立っていった。

「このままではいけない!!」という気持ちで、施設を管理している東京都下水道局、そして公園計画の権利がある大田区にかけあった。マスコミにも悲惨な状況を話し、新聞、テレビなどがとりあげてくれることになった。かいあって2ヘクタールが「実験的」に整備されることになったのである。翌2002年、コアジサシが飛来する前の3月16日から下水道局、大田区の職員をまじえ、約200人のボランティアが参加して整備が始まった。砂利や砂の代わりに下水の汚泥で作られたレンガ色のスラッジライトを敷き詰めることになり、卵が目立つレンガ色の対策として、約30トンの貝殻を富津から運び散布、また白いペンキを噴霧する、などの工夫を凝らした。金網の下にヒナが隠れるシェルターやカラス除けのテグスも張り、絶滅に瀕している野鳥コアジサシの屋上営巣地が形作られていったのである。この夏の総営巣数は推定1,224巣であり、巣立ちは推定606羽となり、前年の5羽が嘘のような数字となった。

コアジサシが旅立ち、閑散とした営巣地で草むしりに汗を流していた頃、山階鳥類研究所からの吉報が届いた。ここで標識足環をつけた幼鳥が、ニュージーランドで見つかったのだ。

このような成果もあって、翌2003年には営巣地をさらに0.8ヘクタール拡張、卵の水没やヒナが流されるのを防ぐため、コンクリートガラでかさあげすることが決まった。屋上に上がって約150羽ものヒナを殺傷した猫対策の猫返しも取り付けられることになった。

このように進化した営巣地にはこの年、約4,000羽ものコアジサシが飛来し、1kmほど離れた野鳥公園から見ると、まるで蚊柱がたっているようだった。この年の総営巣数は推定1,984巣、孵化したヒナは推定1,600羽という巨大コロニーとなった。NHKのニュース解説では、都会の屋上の新たな取り組みとしてとりあげられ、読売新聞の一面で親を待つヒナの写真が大きく掲載されたりした。

コアジサシの習性から、大規模営巣地は長続きしないというジンクスは、2002年に営巣地を視察に来た蓮尾純子さんから言われたことだ。しかし波はあるがスタッフの創意工夫が実って、営巣地は存続している。2012年までの総営巣数は推定5,837巣で、総孵化数は推定3,339羽である。営巣地の総面積は6.2ヘクタールにもなり若い研究者などの参加も多く、コアジサシネットワークの開設や渡りのルートを解明するための新しい試みなど、今後の研究成果が期待される。のべ4,000名を超える一般ボランティアの協力や行政との連携が様々な形で実を結んできた。コアジサシをキーワードに生態系保全の先駆けを目指したい。